オプション教材（きょうざい）ズミ 暗唱長文集（あんしょうちょうぶんしゅう）

●暗唱の手順　１日分

・１日目は、まず、1の文章を３０回音読します。最初の数回はゆっくり正確に「てにをは」などを間違えないように読みます。
　正確に読めるようになったら、ある程度早口で棒読みで、句読点などであまり息継ぎをせずに読んでいきます。
　イスにきちんと座って読むと読みにくい場合は、歩き回りながら読んでもかまいません。
　お母さんやお父さんは、読み方の注意などは一切せずにただ優しく褒めるだけにしてください。
　１５回ぐらいでもう空で言えるようになることが多いと思いますが、できるだけ３０回続けて読んでください。
　なぜ回数を決めて繰り返すかというと、「覚えられたらよい」という目標でやっていると、暗唱の教材が難しくなったときに、「難しいからできなくなった」ということになりがちだからです。「決まった回数を繰り返す」という目標でやっていると、難しい教材になっても同じように暗唱ができます。
　３０回音読しても暗唱できない場合は、もう１０回音読してください。
　これでその1の文章が暗唱できるようになります。
　それでもできない場合は、暗唱の自習はいったん終了してかまいません。また機会を見てやっていきましょう。

●暗唱が難しいときは

　暗唱のような短い時間の学習は、夕方にやろうとすると忘れてしまうことがあります。また、毎日同じようにやらないとできるようになりません。できるだけ、朝ご飯の前などに、家族のいる中でやるようにしましょう。
　そして、暗唱を毎日やるのが難しい場合は、暗唱の自習はせずに、読書の方に力を入れていってください。

●暗唱の手順　１週間分

・１日目に、1の文章を暗唱できるようにします。
・２日目は、2の文章だけを同じように３０回音読し、暗唱できるようにしておきます。
・３日目は、3の文章だけを同じように３０回音読し、暗唱できるようにしておきます。
・４日めは、1、2、3の全部通して、１０回音読します。すぐに暗唱できなくてもかまいません。
・５日めも同じように、1、2、3の全部通して、１０回音読します。
・６日めも同じように、1、2、3の全部通して、１０回音読します。
・７日めも同じように、1、2、3の全部通して、１０回音読します。すると、1から3の全部の文章が暗唱できるようになります。

●暗唱の手順　１か月分

・１週目に、1から3の文章を暗唱できるようにします。
・２週目は、もう1から3はやらずに、今度は4から6の文章を暗唱します。
・３週目は、同じように、7から9の文章を暗唱します。
・４週目は、1から9の文章を全部通して、毎日４回ずつ音読します。
・すると、１か月で1から9の文章が暗唱できるようになります。

●暗唱の活用

・暗唱のコツをつかむと、自分の好きな本の１部を暗唱したり、英語の教科書を暗唱したりできるようになります。また、覚えるつもりがなくても、物事が頭に入りやすくなります。

●より詳しい説明は

　より詳しい暗唱の仕方は、「暗唱の手引」（http://www.mori7.net/mori/mori/annsyou.html）をごらんください。

1 近代科学とは、十七世紀にガリレオやデカルトたちによって開始され、次いでニュートンをもって確立された科学を指している。近代科学が現代科学の基礎となっていることは言うまでもない。近代科学の自然観には、中世までの自然観と比較して、いくつかの重要な特徴がある。

2 第一の特徴は、機械論的自然観である。中世までは自然の中には、ある種の目的や意志が宿っていると考えられていたが、近代科学は、自然からそれら精神性を剥奪し、定められた法則どおりに動くだけの死せる機械とみなすようになった。

3 第二に、原子論的な還元主義である。自然はすべて微少な粒子とそれに外から課される自然法則からできており、それら原子と法則だけが自然の真の姿であると考えられるようになった。

4 ここから第三の特徴として、物心二元論が生じてくる。二元論によれば、身体器官によって捉えられる知覚の世界は、主観の世界である。自然に本来、実在しているのは、色も味も臭いもない原子以下の微粒子だけである。5 知覚において光が瞬間に到達するように見えたり、地球が不動に思えたりするのは、主観的に見られているからである。自然の感性的な性格は、自然本来の内在的な性質ではなく、自然をそのように感受し認識する主体の側にある。つまり、心あるいは脳が生み出した性質なのだ。

6 真に実在するのは物理学が描き出す世界であり、そこからの物理的な刺激作用は、脳内の推論、記憶、連合、類推などの動きによって、秩序ある経験（知覚世界）へと構成される。つまり、知覚世界は心ないし脳の中に生じた一種のイメージや表象にすぎない。7 物理学的世界は、人間的な意味に欠けた無情の世界である。

それに対して、知覚世界は、「使いやすい机」「嫌いな犬」「美しい樹木」「愛すべき人間」などの意味や価値のある日常物に満ちている。8 しかしこれは、主観が対象にそのように意味づけたからである。こうして、物理学が記述する自然の客観的な真の姿と、私たちの主観的表象とは、質的にも、存在の身分としても、まったく異質のものとみなされる。

9 これが二元論的な認識論である。そこでは、感性によって捉えられる自然の意味や価値は主体によって与えられるとされる。いわば、自然賛美の抒情詩を作る詩人は、いまや人間の精神の素晴らしさを讃える自己賛美を口にしなければならなくなったのである。0

（河野哲也『意識は実在しない』）

1 日露戦争の前後から、いわゆる自然主義文学とよばれるものが文壇に台頭してくる。自然主義文学が、人々の私生活の微細な部分への関心と、そこに何らの理想を仮託せず、それをひたすら描写することをモットーとするものであったことは、ここで改めて述べるまでもない。2 こうした文学的志向は、時に、「無愛想、無解決」という言葉で呼ばれたが、そこには、自然主義の理論的指導者のひとりである長谷川天渓が「筋の無い小説が、自然派の最も善き代表である」と述べたように、何らかの目標や解決をもったものとして物語を構成し叙述することを拒否するという姿勢があった。3 長谷川によれば、「現実派コスモスにあらずして、ケオス」なのであり、もし小説というものが、このような現実の徹底した描写を心がけるものであるとするなら、それが、「無解決」を内容とすることは当然だということになる。

4 この時期の日本においては、国際的には、日露戦争の勝利によって、日本の対外的地位も安定し、かつての、「独立」のための切羽詰った「文明化」への衝迫的な意識も弛緩しつつあった。5 また、国内的には、各領域で制度や組織が確立され、草創の時代に必要とされた様々な新奇な企業者的な試みの意義も低下し、むしろ既存の制度や組織への適合ということが求められるようになっていた。6 そして、それと同時に、社会の各領域での機会の減少ということが切実に意識されるようになっていたのである。明治初年においては、勤勉の倫理を説く「西国立志編」がベストセラーとなったように、努力は必ずそれに応じた報奨をもたらすということが、少なくとも観念の上では広く受け入れられていた。7 この点は、『学問のすゝめ』で、福沢諭吉が、貧富上下の差は、ひとえに学問の有無によると説きえたことにも示されている。しかるに、明治も後半期にはいると、福沢自身も、「貧富は必ずしも本人の知愚のみに帰すべからずして、自然の運不運に生ずるもの多きを知るべし」と述べるようになっていた。8 すなわち、この時期においては、努力が必ずしも所期の成果を生まず、そのため、むしろ、すべて「運不運」―「偶然」に係っているのではないかということが、より強く意識されるようになったのである。9 従って、ここでは、この世の不確実性ということも、もっぱら否定的な見地から眺められ、人々の日常生活においても、時間の経過は、かつての創業期の明確な目標に向けて流れる充実した直線的進行というよりは、予期しえぬ偶然に満たされた、それこそ「無解決」の脈絡のない連続の過程として捉えられるようになっていったのである。0

（坂本多加雄『近代日本精神史論』）

1「個人」に終始する社会観に立つ社会学を読むたびに念頭を離れない想念がある。それは、勧善懲悪の「時代劇」が抱えている矛盾である。物語にはいかにも悪そうな商人が腐敗した役人と結託して罪のない一般庶民を苦しめる。2悪はどこまでも悪である。悪の勝利が誰の目にも明らかになりそうになった瞬間、正義の味方が颯爽と登場して、悪を成敗する。最後に正義は勝利する、というのが大方の筋書きである。それはまさに飽きることなく延々と作り続けられてきた「時代劇」の骨格である。3長く続いていくには、やはりそれだけの魅力がなければならない。特定の型の構造を持った物語こそが、時代を超えて人々の支持を保っていくのである。私見では、「個人」に終始する社会学や倫理学にもよく似た構造が含まれている。

4単純な勧善懲悪の物語が現実離れしていることは、もちろん熱心な時代劇や西部劇の愛好者にも分かっている。むしろ、愛好者の多くは、その種の論理の破綻を楽しんでいるところがあり、口々に強引な結末を非難しては喜んでいる。5毎回悪者が斬り殺されるが、そんなに大勢の悪者を召抱えている殿様自身に責任はないのか。殺された悪者にも親族はいないのか。そもそも悪者の関係者は全員悪者なのか。そうした話題である。6もちろん、この種の疑問が勧善懲悪の時代劇や西部劇の根幹にかかわるものであることは、誰もが知っている。むしろ、毎回同じ様式で繰り返される「勧善懲悪」の構造自体が、これらの矛盾を必要としているので、矛盾を解決してしまったら物語自体が成り立たなくなってしまうことぐらいは、少し考えれば分かることである。7もしも、憎々しい顔の悪代官が、実は天下国家の行く末を憂える義人の仮の姿であった、ということになってしまっては、勧善懲悪時代劇の枠には収まらない。もちろん、勧善懲悪時代劇の愛好者は、その種の複雑な物語を望んでいるわけではない。8この意味で時代劇や西部劇の愛好者は、約束事を知っていて楽しんでいるのである。まさに、約束事の中で特定の現実感を実現することによって、時代劇は視聴者たちに訴えかける力を得ているのである。

9視点を変えて言えば、勧善懲悪の「時代劇」は、あらゆる社会問題を正義の味方である主人公個人の問題に押し込めて取り扱っていると言える。重要なのは、舞台でかっこよく立ち回る主人公だけで、脇役たちは主人公の引き立て役である。0もちろん、悪役に至っては、複雑な人間関係や社会性は拒否される。それどころか、人格そのものの複雑さすら視野に入ってこない。「悪代官」や「悪徳金貸し」は、主人公に斬り殺されるためだけに存在するからである。すべては正義の主人公の個人に出発し、そしてそこに終結する。

（犬飼裕一『方法論的個人主義の行方　自己言及社会』による）